

さんどう思って聞いておられましたか。なんか化石みたいなおじさんが出てきて、お祖父さんが出てきて何か喋るんやな。ちょっと声が悪いのは、先程から3日程寝てまして、お医者さんから絶対に安静だと、これ以上動いたら死にますよと言うから、死んでもいいからみんなに会いたい、そんなことは思いませんでやはり死なないほうがいいんですけれども、でも今朝熱が下がったっていうんでそれじゃ予定通り飛行場に行きましたら“昨日キャンセルになってますよ”と言われてまして、どうしてキャンセルになっているか知りませんが、うちの秘書のお嬢さんがとりあえずキャンセルなんて言ったんじゃないかと思いますが慌てまして、乗せてもらいやって来ました。アメリカに行く飛行機が足りなくなったからみんな北海道にこのウイークエンドには来るとみえて北海道行きは満員でございまして、来てから時間がえらいかかりまして申し訳ありませんでしたけれども、5分程遅れました。

さて今日は若いみなさんに私の方からこれだけのことは是非一つ考えてなということを経つか言いたい。先程のお話のように今日みなさんがお話をする中心になる問題は【家族のきずな】ということでありました。家族のきずなということについて私も少し考えては参りました。けれどもその前にみなさん方のお顔を見、またここに来た時に最初にみなさん方がこの前の9月11日にありました、あのニューヨークの悲劇をご覧になって毎日のようにニュースがああ状況を私たちにを見せてくれます。あの大きな百何階建ての二つの建物が音を立てて崩れ落ちている姿を私たちが見た時に、この科学の世界の中でこんな事があっていいんだろうか、あるいはこのように世界のことを考える時にこのような事があっていいんだろうかということを皆さんも考えられたと思います。アメリカから来たお友達はその事にも心を傷められておられるだろうと思いますし、私も姪がああで一人働いておりますが、未だにどうなったかの返事は来ませんから判りませんが、多分あいつのことだから元気だろうとは思っておりますけれども、何人かの仲間がああ近くにあの頃に居たことは間違いのないのであります。

一つのテロが起こったということについて今大変な騒ぎがあります。その騒ぎがある中で私たち一体何を考えた方がいいのか、ロータリーとはあるいはロータリアンとはあるいはローターアクターの人もローテックスの人も青少年交換の人も全ての人達もロータリーというものは何ですかと聞かれた時に、ロータリーというのは国際の平和をみんなで造って行くんだ、その平和を世界に平和をもたらすために幾つかの奉仕のプログラムを組みながらそこでお互い同士が新しい世界の中でお互いがしっかりした友達になって、そしてよい世

界を造りたいなと願って生まれて参りましたロータリーの中の少なくともそれに係わるみなさん方にとって、この問題は大変大事であろうというふうに思います。

日本にとっても同じでありますけれども、私は今日は時間がございませぬ、ことに家族のきずなについてお話をしなければいけませんので、少しずつとばさせて頂きますけれども若い方々には宿題というふうなつもりで聞いて頂きたい。

第一番のことは何かというと、そういうことから出てきた時に日本というのは、本当に国際奉仕であるとか国際理解であるとか国際交流であるとか国際協力であるとかということをする時に、それだけの意識とそれから見通しを持ちながらしてますかということでありました。数年前でありますけれども中西さんという確か京都大学の教授ですけれども、日本の脱知性化現象はあまりにも見るのに忍びないほどに今惨めな姿をしている、国際情勢に無関心であるとかあるいは感受性の喪失ということに私は、これでは日本は世界の中で生きて行けるかどうかということをおぼえている青年じゃないですよ、お年寄りあるいは政治に係わる人達にも含めてであります。一体私たちが今国際的な感覚について鈍くなっているかということをしみじみと。同じことでもありますけれども私はかつてこんなことを話したことがあります。それはあるコラムに載った話でありますけれども、ある方が来てね“世界中がもっと豊かになる為にはどうしたらいいかということをお考えよう”一つ、北極の氷をとって、それをアフリカの沖に置いて、その北極の氷をアフリカの砂漠の中に撒いて、そして砂漠を緑化するということができるはずだ、水をちゃんと撒いておけば緑化ができるはずだからそれをしたらどうだろうか、これが一つ。もう一つは、ヒマラヤの雪を全部解かして、そこから流れて来る水でもって水力発電を作ったならば、少なくともアジアにおける電気の不足を補うことができ、ますます私たちは電気を利用することができるようになる、このようなことを計画しました。そしてそれを日本の実業界の人たちに持って行って“どうですかねこういう計画”、この計画をするためには世界の戦争に使うお金の僅か1年分のお金でこれができるんです。20年間に分ければ20分の1で、世界が1年間に使う戦費の20分の1でこれぐらいの大きな仕事ができると世界の平和に貢献することができるんじゃないですか。実業界の人はなんて言ったか、“そうかそれはいい考えだな”というふうに言ってくれたそうです。それでその人はもう一度今度は政治界の人、政治家の人たちにこのことを言って“どうでしょうこういうふうにしたら日本は世界中から尊敬される国になりませんか”、“いいね、やったらいいと思うけど、それで日本はいくら儲か

元国際ロータリー理事 今井 鎮雄先生

「偉い人達から“あの先生偉いぞ”と言われたら皆



る”。途端にその方がっかりした。自分がいくら儲かるかということ計算の中において世界をもっと豊かにする、世界の人と手をつないでやるということは殆ど不可能に近いじゃないか、そういう感覚がある限りにおいて日本がこれから世界に尊敬される国にはならない、こういうことをコラムが書いているのであります。同じことであります。私たちは、今こういうふうに考えました時にいくつかのことがあります。私は、昨年でしたか一昨年ですか忘れましたが、ロータリーの友に書いたことがありました。英文に直して英文のロータリーの友に出しましたところ、それが今年あっちこっち行ったんでしょね、いろいろな国のロータリアンから“お前の考え方は大変おもしろい考え方だ、私はあなたに賛成する”という手紙が来ました。それはどういうことかと言うと、こういう事です。2025年私は死んでいるかもしれませんが、なにしろ80ですから、みなさんたちはまだ一番中心になって国を背負わなければならない時だと思えます。25年後、いくつになるか数えてみて下さい、皆さんは中堅の日本のリーダー達なはずです。この25年になった時に世界がどう変わるだろうかということを目測したということです。

一つの予測はこうであります。おそらくあまり変わらないだろうし、貧しい国は今まで通り貧しいだろう、8,000万人いる毎日飢餓に苦しんでいる人たちを今世界中の国、ことに国連を中心とするいろいろな例えば食料の計画機構のようなものは、何とかして8,000万人いるその飢餓人口を4,000万人に減らしたいとしてるけれどもその人口はなかなか難しいかもしれない。でもそういうことは続いていこう、富めるところはますます富んで、貧しいところはますます貧しくなってくるかもしれないけれど、今とあまり状況は変わらない。貧しいところはいつまでも貧しく、豊かなところは何とかしてさうだろう、これがあまり今と変わらないというのが一つの予測であります。

二つ目の予測。そうではないグローバル化が進んで来る。経済のグローバル化が進んで来ると、今まで物を買わなかったロシアであるとか、中国であるとか、あるいはインドであるとかいうような大勢の人口を抱えているところが、同じように経済が豊かになり暮らしが豊かになって、またいろいろな物を買いたい、こんな物を持ちたいということになるから、経済は段々世界中のそういう今まであまり物を買わなかったところに物を売れるようになるために、経済はやはり同じように右肩上がり成長していくだろう。そして25年後には、今よりも全体的にもう少しマイルドな、そして豊かな生活をする事ができる世界になっていると思うよ、というのが二番目であります。

三番目の予測、そうはならない。でも、もしも私たち

が考え方を改めてどの人間もみんな大事な人間なんだ、その人権を大事にしなごらお互い同士が手を握りあって支えあうならば、私たちは今の地球の中においても十分に人を養うことができるのではないか。今の人口が60億、それが70億位になるだろう、あるいは80億になるかもしれない、食べる物が無くなるかもしれない。今のままなら食べる物が無くなるかもしれないけれども、大変無駄をしているところの食糧をもう少し削って、みんなが有る物で我慢しあうようなそういう仲のよい世界を造るならば、世界はそれなりに豊かな国になるだろう。

この三つのうちで、さあどれが一番みなさんにとって25年後を考えた時になると思えますか、ということでありました。若い人たちが世界中から集まりまして、今日のようにアメリカの人も、あなたは何処から、スウェーデン、フィンランド、あなたはアメリカ、後はもうよろしい、沢山おられると思えます韓国の人も中国の人も16ヶ国おられるそうですから、その人たちがそうやってお互い同士が自分たちの持っているものを分け合っていけるならば私たちの世界は25年後にも本当に豊かな世界になるかもしれない、この三つです。どれが本当に現実に来ると思えますか、と質問しました。そしたら、若い人たちの中で約80%の人が何と言ったかと言うと、今までとあまり変わらないだろう、要するに儲けたい人はまだ今までのように儲ける、それから貧しい人はいつまでたってもはい上がれないで貧しくて今と同じような状態が25年後も続いているだろうと。それでは、みんなはどれになったらいいと思うか、どれになるために努力したらいいと思うかと聞いたら、100%の人が3番目でした。全ての世界の人たちとお互い同士に富を分け合い、知識を分け合い、お互いの友情をかわしあい、そしてそのことのために皆が楽しい世界を造っていくことこそ私たち、大事なことなんではないのかということをもみんなが言ったということです。さあ、これは一つの仮説にすぎません、どうなるか判りません。しかし、今私たちは、目の前でそういうようなことを具体的に考えなければならぬ時期に来ているんだらうと思えます。国と国との戦争ではないけれどもテロが起きて、あんな大きな事件がアメリカで起きた時に、アメリカの大統領は何度も何度も演説をしております。そのアメリカの大統領が何度も何度も演説をしていることを、世界中の人たちが一つ一つ今分析しながら、私たちはどのように対応したらいいかということを考えているでしょう。日本の政府の人は多少後手に廻っているようですね、自分たちがどうして生きていけばいいのか、自分の国がどうあったらいいのかということについて十分な答えがなく、減少に向かって今慌てふためいて狼狽をしているところの姿がよく見えるんでありますけれども。

しかし、時間がもう少し経つにしたがって何か考えていくでしょう。その時に私は面白いことに気がつきました、それはこんなことでした。あのブッシュ大統領は、「これは国と国との戦争ではありません」、これが一つでありました。「国と国との戦争ではありません、私たちは何処の国からも軍隊によって侵略されたのではありません、国と国との戦争ではありません。」もう一つ、「私たちはイスラムの社会の人・アラブの社会の人とアメリカ西欧社会の人たちが今戦争をしようとしているのでもありません、文明の衝突が起きたとも思っておりません。それはテロという事件を起こした一人の個人・人間、あるいはテロという集団、その集団が犯したところの(人間を尊重しない)、そういう人たちが犯した人類への大きな暴挙であるというふうに考え、そのことに対して私たち世界の人が一緒に戦わなくてはならないと思えます」ということを言っておられるのであります。

日本の国際貢献であるとか、安全保障の問題であるとかいう判断の基準をどうしたらいいかということでも迷っておりますけれども、そここのところの問題をいくつか私たちはここで真剣に考えなければいけないのではないか、一つの“こと”は何か、人間一人一人が大事にされるということの視点をしっかり持ってこのことを考えて頂きたいとブッシュ大統領が言っている言葉を、私たちはある意味において大事な言葉だと受け取ります。私は、これはブッシュ大統領だけが考えたのではない、たぶんそこには大変な知恵者がいるだろうと思えますけれども、そういう方々が一緒に考えながらこういう提起をされたということでもあります。この中で“文明の衝突”という言葉があるのにお気づきの方がありません。高校生の諸君たちは、この“文明の衝突”について一つ思い出す本を思い出して頂きたい。サムエル・ハンチントンという人が“文明の衝突化”という論文を1993年にポリアフェアスという雑誌に書きました。それは何を意味しているかと言うと、あのソ連とアメリカの二つの巨大国が長い間冷戦を続けていたのを解消して、1989年に一応解消しました。このことが有名なベルリン壁でありますね。そして、それと同時に中国においては天安門事件が起こりまして、あそこで時代(歴史)が一つの大きな変化をしてきました。こうして歴史が変化したときにサムエル・ハンチントンという学者は、「今までは国と国との戦争だったけれども、これからは国と国との戦争というものは無くなるだろう」、「それじゃ世界が平和になったかということにならないじゃないか、コソボを見てごらん、チェチェンを見てごらん、あるいはその他の所を見て下さい、そこにいくつかの小競り合いがあるでしょう。その小競り合いは実は文明と文明の違いがぶつかり合った、そういう所でぶつかり合ったとい

う現象なんですよ」と言って、世界は国と国とは戦争は無くなるけれども、文明と文明とは今後衝突する可能性があるということも挙げました。その文明というのは人が住んでいるいろいろな価値の体系もありますけれども、一つはどのような文明かと言うと、ヨーロッパを中心とするキリスト教文明と言いますか、これを彼らはですね、欧米のキリスト教文明というふうに呼びました。もう一つは何か、これはロシアであります。スラブ族が中心になるあの大きなロシアというのは東方キリスト教文明というものを持っている。それからその次には、アラブの人たちが持っているイスラム教ということを中心とするイスラム文明というものを持っている。それから、古い歴史を持ったインドはヒンドゥー文明を持っている。それから、中国は儒教に育てられたところの儒教の文明を持っている。それから、アフリカ並びに南米、南米はむしろ欧米文明に入りますけど、アフリカはアフリカとしての民族の文明を持っている、七つの文明に分けた後でハンチントンはこう言いました。「もう一つ違った文明がある、それは日本だ。日本という国は小さな国にもかかわらず、そしてその影響を随分たくさん、ある時はインドの仏教の影響を受け、中国の儒教の影響を受けたけれども、今から1,500年ほど前にそれを自分のところに消化して日本文明というものを作り上げた、1,500年を経た時にこれは大変独自の文明を持っている国である」こういうふうには彼は挙げまして、この八つの文明を、これがやがては衝突するだろう、衝突するときに、似たようなところではだんだん同じように仲間が増え仲間が増え仲間が増えて、順番に順番に順番にこの文明が消化されていく、そして最後に残るのが西欧と非西欧という二つの文明がぶつかるに違いないということも言ったのであります。この論理は、これは有名な政治学者でありまして、随分このことは大きな衝撃を世界中に与えましたけれども、しかしそれについては大変このことは衝撃的ではあるけれども、しかしまだ必ずしも学問として政治学としては、必ずしもこのことは成熟していないということで、最近においては、ごくですね、他のいろいろな理論もたくさん出てまいりましたけれど一つの大きなポイントになったところがございまして。それを踏まえて今、先程言いましたアメリカのブッシュ大統領は、「これは国と国との戦争でもありません、文明と文明との戦争でもありません。テロという一人の個人を尊敬しない人たちによって行われるところの一つの暴力にすぎないのであって、この暴力について私たちは世界中の人が戦わなければならないと思えますよ」、こういうことを言ったのであります。私たちは、今こうして考えてきたときに、歴史が非常に激しく動いているということについて、若い人

は考えて頂きたい。今日の前で起こっているこういう事件、これが積み重ねられながら私たちは長い歴史の中でその時の人間がどんなふうにして世界を導き、世界を平和に導きあるいは世界の理解を深めるようにしたかということが問われていくきっかけになるだろうと思います。私は、その意味では今の一人一人が立たされているところを非常に大事にお考え頂きたい、これが一つであります。これを枕にさせて頂きまして、家族のきずなのことについて考えてみたいと思います。

今私は、政治的なこと、あるいは大きな国と国との動き、あるいは今事件として起こったことを取り上げてこんなような問題を考えなくちゃならないんですよということを申し上げたんでありますが、今度はもう少し身近なところで、やはり考えて頂かなきゃならないものがあります。今日は、みなさんは家族のきずなことでお話し合いをすることになっておられるはずで。家族のきずなことについては、実はこれも十数年前からいろんなことで問題になってまいりました。何故問題になってきたか、長い間伝統的に持ってきた私たちの家族に対する考え方あるいは社会に対する考え方あるいは家庭に対する考え方というのが、ごく最近に非常に大きく変わった中で起こってきた幾つかの問題が現象として大変苦しいと言いますか、あるいは可哀相なと言ってもいいんでしょうか、あるいはどうしていいか分からないような現象がたくさん起こってきたというふうに見えるからであります。一つです、これはもう12～3年前になると言えますけども、慶応大学の医学部の教授で小此木恵吾という先生がおられますが、この慶応大学の先生の小此木恵吾という先生、精神科のお医者さんであります。この先生が“家庭のない家族の時代”という本を書きました。大変これは大きなショックの本であります。家庭のない家族の時代、家庭と家族をそこで区別しているんです。この家庭のない家族の時代というのには色々なケースをあげて書かれていますけれども、その冒頭のはしがきみたいなおもしろいんです。アメリカのこれにはアメリカで流行った映画でコンチネンタル・ディバイドという映画がありました。聞いたことがありますか。アメリカから来たお友達は、昔だから知らないかもしれないコンチネンタル・ディバイドという映画がアメリカで流行りました。流行ったのはどういうことかと、シカゴにある大きな新聞社の敏腕の新聞記者が取材に行くんです、その取材には何処に行ったかというコロラドの山の中で鷲の研究をしている女性の鳥類学者・自然科学者のところ、彼女の研究をレポートするためにそのアメリカンのシカゴの新聞記者が尋ねて行くんです。こうして一ヵ月位、その鷲の研究をしている女性の研究者の側にいて毎日

カメラに撮って、話を聞き、いろいろなことを集めてレポートを送るわけです。その二人がしばらくしたときに、二人山のなかに居るんですから恋に陥りまして、いよいよ結婚式をすることになります。彼ら二人は、デンバーに下りてまいります、そしてそのデンバーでもって牧師先生に結婚式をして下さいと言います。そうすると牧師先生が二人を前に立たして、あなたは苦しいときも嬉しいときも何時でもこの人を自分の妻として愛しますか、“イエス”とこう言うんでね、あなたはこの人を夫として“イエス”と言って二人は、ではこれで結婚ができましたお祈りをしましょうとお祈りしてもらって映画ですよ。ところがそのお祈りをしているときに、二人が顔を合わせてこう言うんです、“ああ、やっとこれで離れて暮らすことができるわね”と。そうすると牧師さんはびっくりします。結婚といったら二人と一緒に暮らすもんだと思っている牧師さんのところへ来て、「結婚式を挙げて下さい」と山の中から二人がわざわざ来て、そして結婚式を挙げた結果何と言ったか、“やっとこれで二人は離れ離れに暮らすことができるね”。自分の心の中に、そしてまた形の上でも、私の妻は山の中で今仕事をしている、私の夫は今シカゴでもって新聞記者をしている、そういうことでお互いが安心して自分の人生を二人でもって離れてはいるけれども、しっかり助け合ってこれからの生活ができ、やっと安心して絆ができたということなんです。これは色々なところであることでしょうね、おそらくこういうような事件についてはたくさんあります。この中から、まずこれを挙げておいて、今言いました小此木先生という先生は実は私たちの社会はかつての社会と違ったように少しずつ変わってくるんだ、こういうようなことをそこで決めまして、家でもそうではないですか、もう家でもお父さんとお母さんがこんな、みんなが出てくるのは茶の間です。そしてそれが済んで、ちょっと何かお父さんに嫌なことを言われると、プイと自分の部屋に潜ってしまう。同じ家庭の中に居ても、集まるのはホテルのロビーのように居間に集まって、一緒にテレビを見るかもしれないけれども、嫌になったらそれぞれ自分の個室に戻って行ってしまふ。自分の部屋に戻って行ってしまふ、まるでホテルに住んでいる家族がたまに食堂かロビーに集まってちょっと話す程度で、嫌になったらみんな自分の部屋、誰も自分を妨げられない誰も他の人のことを干渉しないという生活を私たちはいつの間にか家庭の中においても、家族の中においても、そうして暮らしているんじゃないですか。それは家族というけれども、そのようなつながりというものがあるところに本当に家族があるんでしょうか、というような問いであります。また小此木さんは、その他にもモデルを書いています。

トーチカ家族というのがあります。トーチカ家族というのは、よそからどんなに攻撃を受けても「私とあなたとこの子供たちは」と言って一緒の中に入ってよそとの交流を絶ってしまう、一つの家庭が自分だけがかたまって誰からも顧みられない、誰からも声を掛けられないで自分らだけでじっと我慢している、そういう家族をトーチカ家族というふうな呼び方で実はこの小此木さんは呼びながら、現代の状況の中で変化したそういう社会の変化の中で、私たちの家族もこれが当たり前だと思っているけれども、少し前と少し後ろではずいぶん変わっているんだということについてしっかり理解しておかなければならないということをおっしゃっているのです。これは一つの20世紀の特徴であろうというふうに言われてます。歴史的に見ますと、家族というものはいつも仲良しで、お父さんが働いて、お母さんが家に居て、子供たちは学校に通っている、そして帰ってきたら、おやつを貰って、そしてお父さんやお母さんの手伝いをするという家族というようなイメージは実はあまりありませんでした。むしろ大昔は働くことにきゅうきゅうとして、自分たちが野良で稼ぐことにきゅうきゅうとしますから、みんなそれぞれに一生懸命に働くことで家族というふうなことに振る向きがありませんでした。経済のほうを中心で、家族よりも経済のほうが重要だったのであります。1960年にフィリップ・リエスというフランスの学者が“子供の誕生”という本を書きました。これもロータリアンのみなさんの中ではお読みになった方がおられるかもしれません。このフィリップ・リエスというのは面白いことを言いましたね、子供というのは勿論人類が始まってから、大昔からですよ、だから何千年も前、おそらく6千年前あるいは縄文の時代からいうともっと前、そういう昔から子供がいたに違いないんです。でもフィリップ・リエスは、そのように私たちの中に小さな子供がいても、本当にこれは私の子供だと言って育てる、そういう子供を認識して子供をこうしなければならぬと考えることができるようになったのは実はあまり古いことではなくて、産業社会が生まれて初めて子供という考え方が私たちの家族の中に生まれてきたんですよということを言った人です。面白いことに彼は、それまではどうなんだろうか、たとえば中世のエッジングを見てください、中世のエッジングを見ると子供たちは生まれてからまだお乳を飲んでる間はまだお母さんのお乳にぶら下がっていたけれども少しチョコチョコするようになると、もうそのへんで走り回って長屋のおじさんやおばさんの間をチョコチョコ走り回る、お前はこっち来いというようなことを言いながら連れていってもらって、子供の洋服なんていうものはありませんでしたか

ら子供に着せるためには大人の洋服をちょん切ってズルと長いのを着せられて、そして子供はそれを着ながら遊んでいた、寒くなったらぬいぐるみや毛布を着せられてあったかくしているという程度の配慮はあったけれども子供としての物はありませんでした。みんなが話しているところに子供はみんな頭を突っ込んで、何か分からないけども大人が笑うと一緒に子供がアハハ笑っているというふうな、そういう状況を描いたエッジングを見せて、こうでした、子供はそれほど大事にされていませんでした。ところがそのような家族が少しずつ変わってまいります。そして農村から大きな工場を中心とする織物工場のところに出てまいります。みんなが出てまいりますと核家族化が始まるわけです。農村の場合には大勢の人たちが一緒に暮らしますから、大家族主義と申しますかそういうところでありましたけれども、そこから次男三男は自分の子供と奥さんとを連れて工場に行くようになります。工場の周りに大勢の人が集まってくる、これが都市化の現象でありますけど、こうなってきますと核家族化というものが生まれてまいります。こういうふうにして家族というものが生まれてくる、父親は農村で働きませんから、畑で働きませんから、工場に出かけて行きますから朝からいない。そうすると子供は一人でお母さんと居るわけでありまして、お母さんはこの子供をどうしたらいいのかということをお考え初めて、学校が生まれた。学校が生まれたのは1800年代になってからであります。もちろん大昔、お寺であるとかそういう所にはいろいろありました。寺小屋というのは無きにしも非ずでした、あるいは武士の中ではそういう勉強をするところは無きにしも非ずでした。でも一般的に普通の子供たちのために学校が開かれるのは、実は1800年代になってからであります。

私は幼稚園の園長もしましたし、幼稚園の先生になる学校の学長も致しました。幼稚園ができたのはいつかという1840年代であります、フレーベルという人がドイツではじめて幼稚園に“キンダーガーデン”という名前をつけましてね、これは幼稚園のはしりです。最ももう少し前、1818年くらいにそれと同じようなものはできましたけど、途中でみんなつぶれて、本当に幼稚園というものが子供のために必要だといって育ててきましたのは、1840年のフレーベルあたりからの時代であります。こうして学校ができますと学校というのはつい19世紀になってからあります。このようなことをフィリップ・リエスは書いて、子供の誕生というのは意識的に子供が自分との絆を持ってそして意識的に子供を支えるという時代は実はそんなに人類にとって長くはないんだということを言いました。もう一つそのことについてですけれども、同

じような話しですけれども、このフィリップ・アリエスが子供の誕生を書いたのに刺激されて、これも同じバリにありますが工科大学の哲学の教授でありました女の方でありますけれども、エリザベート・バナテールという人がいます。このエリザベート・バナテールという人が面白いことを書いた“プラス・ラブ”という、プラス・ラブ、プラスもわかりますよねプラスマイナスのプラス、ラブもわかりますよねアイラブユーのラブであります。ラブですね、ハウマッチアイラブユーです、このことを使ってプラス・ラブという本を書いたんですね。この人はその中でこう書いているんです。1870年代のバリでもって生まれる子供は1年間に約2万1千人ほどいたそうです。2万1千人ほどおったけども、この中で、この子供の中で僅か平均して千人ほどがお母さんのお乳で育てられた、お母さんのお乳でお母さんと一緒に家で育てられたお母さんに育てられたのは千人だったんです。それからもうあと千人は乳母に育てられた、お母さんと同じ家にいたかもしれないけども実は乳母に育てられた人が千人なんです。あとの1万9千人、これは平均ですからね警察署長の統計なんだそうですが、この1万9千人の子供たちは何処へ行ってしまったかという、この子供たちはみんな農家にやられるわけです、農家に貰い子されていきます。養女にだされたり養子にだされたりします。農家では耕作をするのにあるいは手がいらすから、薪を持って行かなきゃならん、折れた枝を拾わなきゃ、落ち穂を拾ってお母ちゃんの後をついていかなきゃならないというふうな農家の仕事には手数がたくさんありますから、そこに子供たちが派遣される。あの中世の小説を読んでいるときにみなさんの中では、「家のおっかあは何でも伯爵様の奥方様じゃそうだけど私は一度も会ったこともないし名前も知らないんだ」というようなことを子供が言うような場面がいくつか小説の中に出てくるのを覚えている人がいるかもしれません。こういうような時代であったものが、今言いました1800年から急に子供のことを大事に考えて、子供のためなら犠牲にしてもいいというふうな母性愛に満ちた親が生まれてきたのはどうしたことなんだろう、このエリザベート・バナテールはそういうことを書きまして、これは母親というのは母性本能という本能ではないんだ、母性愛は本能ではなくてお母さんと子供とがお互い同士に触れ合うということによって、接触することによって生まれてくるころの愛情なんだということをそこで彼女は言っています。よそのお母さんたちが言ったそうです、「あなたはね子供を育てたことがないからそういうことが分からないでしょう、私が一生懸命育てているのは、これは私が本当に命をかけてもこの子供を大事に思っているんですよ」

と。そのときにこの先生は、いいえ私も二人の子供を育てました、私も同じように子供が可愛い、しかし子供が可愛いのは母親、女親の本能からではなくて、子供と一緒に育ってくる環境の中でその子たちをしっかりと育てなきゃならないということが段々自分の中にあるんだということを言っているのです。

さあ、私が言ったことは分かりますでしょうか。私が言ったことの二番目、一番目のことは世界の歴史を考えて自分の立場を覚えて下さいということを行いました。二番目のことについては家族のきずなということを考えて、私たちは家庭の中において父親とか母親とかあるいは兄弟とかいう中でどれほどお互い同士が信頼関係を持てるか、絆を持てるかということ考えたけれども、絆を持つということについては実は必ずしもそれはいつも同じようなものではない、歴史によってずいぶん違ったものが出てきているんです。そしてその違った物の中でそれぞれの時代の人たちが自分と家族との間の絆をどう結ぶかということ真剣に考えながら生きてきたんですよということを申し上げました。私たちは今こうして考えてきたときに、現代はいったいどうなんでしょうか、現代はどうなんでしょうか。

児童虐待防止法というのが去年の11月20日でしたかね、発効いたしました。去年にはいろいろな大きな福祉の日本の社会の中には福祉の大きな法律が変わりました。例えば、社会福祉事業法というのが変わりました。社会福祉法という法律に去年変わりました。これは介護保険と並べて社会福祉の在り方も変えるんだ、社会福祉の基礎的な考え方を変えるんだ、今までは措置として国がお世話をしていたけれどもそうではなくて、自分たちが福祉のサービスを受けたいと思う人は契約をして福祉施設からサービスを受けるようにして下さいというふうになるんだといって福祉の構造が変わって参りました。こうした中でもう一つ大きく変わって参りましたのが何かというと児童虐待防止法という法律。児童虐待防止法って何か。親が、父親が、母親が、あるいは大人が子供たちをいじめる、ある時には死に至らしめるこういう状況がずいぶん日本にたくさん行われるようになりました。このことを心配して、なんとか子供たちのことを救うためには家庭の中でしっかりと子供のことを考えてもらうことが必要なんではないかな、こういうことが考えられてまいりまして、このような児童虐待をしないようにする法律をつくったのであります。これは、法律をつくりましたけれども、どうやって作っていいかわかりませんから3年ごとに見直しますよ、そして段々実勢に合わせたようないい法律にしますよということの限定をつけておりますが、しかしそういう法律が生まれました。実の親

がしつけと違ってやっていたことが実はしつけではなかった、こういう事件はそんなに昔の事ではない。今から15年ほど前には、非常に日本の中でも数が少なかったんです。私が今世話をしております施設は、今から15年ほど前に、ある記念の年になりましたので記念の講演会をやるよという時に、緊急発進・今子供たちが危ないという講演会を致しました。それは、アメリカでこのような児童虐待を受けた子供たちの側に立って弁護士さんをする人たち、そういう人たちに来て頂きまして、アメリカでは現実にはどんなことが行われているか、何が原因でそうなっているかということ報告してもらったことがあります。その頃、日本ではほとんどありませんでした。しかし、現代はそうではありません。現代の日本では大変な数字になっている、毎日のように新聞に載っているということ、みなさんもお聞きになったことがあるかもしれません。この児童虐待の問題については、私たちはですね、いろいろな所にありますけれども、こんなことが書いてありました。それは、ここに書いてある中で子供への虐待は増える一方です、アメリカではアメリカのケース、アメリカでは1年に3万件の通報が行政に寄せられています、3万人の子供たちが児童虐待に遇っているということの通報があった。これ大事なことは、子供は通報しないんです。チビでできないんです、まだだから近所の人、あの子は親から虐待をされているんじゃないのと言って、警察やいろいろなところに届ける。それで通報がありませんから、現実の数はずっと多いんです。年間に300万件の通報が寄せられていて、そして心身への危険度が高いという状況が増えております。これをどうするんだらうかということ、今大きな課題になっているということがあります。このことを考えなければならないときに、私たちはどうしたらいいんだらうか、私たちは、子供たちが無痛分娩で生まれ、生まれてすぐどこかの託児所に連れ、そして少し大きくなったら保育園に行ったりあるいは幼稚園に行ったりしてまいりますと、母と子の絆というものはますます離れてまいります。基本的に人間の尊厳を認めなければつい乱暴するようになるというふうな言い方がありますがけれども、実はそれをするための価値観が確立するような場所としての状況に私たちの社会が今なっていないということでもあります。こんなに大勢になったらどうしよう、じゃ今の若いお母ちゃんたちがみんな悪いんだな、子供を教えることが、子供を育てることも出来なくなっちゃったのかと言うけれども、それはただそういう訳ではありません。長い歴史の中の価値観と長い歴史の中の一つのシステムが変わってきているときに、こういう問題が起こっているということ。そういう中で、私たちは一旦もう一

度その価値観を取り戻す。皆さんのディスカッションの時間が無くなると困りますから、こうした中でじゃ何が大事なのかなと考えてみますと、こういうことが大事であります。それは、基本的に他の人としか一緒に住めない、他のことを気にしないでは生きていられない存在だということを知って欲しいんです。ある心理学者はこんなことを言いました。それは、人は自分の住居、住も食も衣も住む所も、食べることもあるいは着ることも、他の人との関係なしには満たされないと。いいですか、分かりますか、人間は、例えば住まいを建てるときに、ああ可愛いあんな家がほしいなとこう言います。あるいは、自分が住まいを建てる、楽しいながらも小さい家ができた、きれいなピンクのカーテンを掛けて、そしてペンキで白く塗って可愛らしい家にする。誰に対してか、通ったひとが「ああ可愛い家ね、きっとここにいる人たちは、何かそんな感性が豊かな人が住んでいるのね」、こういうことが自分にとって幸せを感じるものである。だから、住むということもそういうことなんですよ。同じこと、食べるということ。食べるというのは、お腹がすいたからご飯を食べるとするのは餌であります。時々私たち笑うんでありますけれども、若い人たちとすると、ああ旨かったようけ食べるんで、先輩なんで食べないんですかと言うから、食べないでもお腹いっぱいや、ちょっとしか食べません、僕は餌でなくていいんやと言うと、僕が食べているのは餌ですか、そうやな餌みたいなもんやないか、ようけ食べてと言って笑うんです。食べることもそうですね。今日は誰のパーティに行きましょう、今日はあの人の誕生日だから、じゃご一緒にご飯を食べようというときには食べる。食べることによって満たされる楽しみが他の人と一緒にくみあって食べることによってより大きく満たされる、花を一つ生けて恋人と一緒にワインを飲みながら食べる食事は、ああ幸せっていう食事なんです。一人でガツガツと食べる食事は幸せではない。時々日本の昔の女の、この頃の女の人は知りませんが、昔の女の人は一人で食べるときはたいてい残り物を食べて、そしてごちそうがあるときには、ご主人が帰ってきたときには一生懸命ごちそうして作る。食事というのは、人とかかわり合いをつなぐということの意味が大事なことであります。衣料もそうです、着る着物もそうです。あの人綺麗ねとかあの人洋服素敵だねということは、他の人がそう見てくれるだろう、その中で他の人とのつながり、他の人が満足してくれる、他の人が私をこんなふうに見てくれるという癖になる、だから衣が必要なんだって、衣というものは本来的なものならば暖かければいいのであります。なんで男の人はネクタイを結んで女の人はスカートをはいていかな

らんかな、どうでもいいじゃないかボロを纏ってでも暖かければいいじゃないかというわけには人間はいかない。動物ならそれでいいけど、人間はそうはいかない、衣も食も住も全て人との関係によって満たされる。そしてその人との関係がより良く満たされるために、他の人から愛されたいということに対して自分もまたこの愛をその人に報いることができるという存在が人間なんだということを言ったある心理学者がいます。私たちは今こういうふうに考えましたときに、基本的には人と人とのかわり合いを考える、認められ受け入れられるということの喜びと同時に人を認めることを受け入れることの重要性、それに応えるようにどう成長するかということが課題になります。あるいはこのことは大変難しいかもしれません。ここを、私は今日はきれんで来たのは、そういう障害を受けた、実の親にいじめられた子供たちを支える場所としてどういうところがあるかと思ったら、結局は抱きしめてくれる一番近い親と代わる人・里親が必要であるということ、ごく最近になって里親というものを今度から専門里親という制度を来年から開こうと日本の政府がしているという記事があったからです。私は20年来神戸市で家庭擁護促進協会という里親になってくださいという運動を続けてまいりましたけれども、殆ど今までありませんでした。しかし最近になって、アメリカその他では里親がしっかりその子を預ってくれる、その子を抱きしめてくれる。初めのうち、その子はまだこれでもかこれでもかといって反発をするんです、それを長い間かかって「私それでもあなたを好きよ、私はあなたのことを信じているよ」と言って抱き抱えることが何回か何回か重ねられているうちに、「お父ちゃん、ごめん」というふうになった。やがてそういうシンナーを吸っている子がやめてしまったり、あるいは学校に行かなかった子が行くようになったり、いろいろしているケースをずいぶん私は知っております。そういうふうになってくる。こういうことを考えたときに、私たちの今の時代にもう一度昔のような家族をあの形でつくれということは難しいかもしれない。しかし、私たちが人間と人間として一緒に生きているときに、その人たち自身がお互い同士に自分とその人との関わり合いをより深くすることにおいて、最初に戻ってコンチネンタル・ディバイドのように死んじやっているならばそれは場所が遠くなくてもなおかつそれは家族のきずながあるということです。そういうような時代にどうしてその絆を持つかということが私たちの大きな課題となるということを言わなければならないと思います。私は今そういうことを言ったけど、最後にもう一つの本だけ紹介しておきます。これは最近私のところでつくった本ですが、今の家庭擁護促進

協会が“信じ合って親子・語り合って家族”という本を出しました。いろいろな里親さんが阻害された子供たちを預かって、3年も4年も5年もかかってその子らと話をしていく、その中で「あなたは私のところで預かった子よ、私とその間、親と子として過ごそうね」と言って死んじやった。

このことを最後の言葉としてですね、私はみなさんに、これから考えたわけです。私たち自身が次第に非人間化の社会になります。話すこともしないで切符を買うこともできます。この頃のですね物ではお金さえ出せばコココーラでも出てきます、何でも出てきます。私たちはそういうときにコンビニに行けば、一言も話しをしないで自分の好きなものを全部買うことのできるような時代になってきました。語るということが無くなってき、信ずるということが無くなってき、繋ぐということが無くなってきた、そういう人間の社会を非人間化社会と申します。これに対して、私たちは人間性回復の社会を造ることが大事になってまいります。ロータリーは、その生まれたときに一番大事にしたのは友情ということでした。お互い同士がお互いを信じて仲間になろうと言って、親睦・友情こそがロータリアンの原点であるということを行いました。それは何故か、人間が共に生きることのためには相手を信じたり、受け入れたり、認めたりすることによってお互いのかかわり合いができるということなんだ、ロータリーがその原点に立つときに、ロータリーこそはその答えができるような人たちがいなきゃならないし、その答えができるような若者を育てなきゃないだろう、私たちはそのことのために大事な時間にお話し合いをして頂きたいと思います。失礼しました。」